



群馬県立
桐生高校

進路意識向上

1年生からの進路意識醸成、 模試結果の徹底分析で 高い志を持たせる

◎町立桐生中学校として開校。校訓は「独立自尊・文武両道」。「グローバルスタンダードの学力を身につける」を、2016年度のミッションに掲げる。07年度からスーパーサイエンスハイスクールに指定。大学・企業・自治体と連携し、独自の理数教育モデル構築に努めている。

設立	1917(大正6)年
形態	全日制／普通科・理数科／男子(理数科は共学)
生徒数	1学年約280人
2016年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、東北大、筑波大、群馬大、東京大、横浜国立大、新潟大、高崎経済大などに129人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ461人が合格。
住所	〒376-0025 群馬県桐生市美原町1-39
電話	0277-45-2756
Web Site	http://www.kiryu-hs.gsn.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎高校入試での学区撤廃の影響で、地元の中学生の成績上位層がほかの地域に流出。安定志向の生徒が多く、高い志を育む指導が必要に

実践

◎1年生からの進路意識の醸成、模試を活用した指導力向上、進路行事の体系化、進路指導部と学年団の連携強化などを図る

成果

◎県外の国公立大学合格に向けて最後まで一般入試で頑張る生徒が増加。教師間の連携も進み、国公立大学の合格実績にも結びついた

地元国立大学から視野を広げ
高い志を持つてほしい

群馬県立桐生高校が進路指導の改革に乗り出したのは、進路指導主事の横関素衛先生が赴任した2010年度のことだ。かつて同校は県内有数の進学校だったが、近隣の進学校が進学実績を徐々に伸ばしていくにつれ、相対的に進学実績が低迷し始めていた。また、07年度高校入試から県立高校の通学区域が全県一区となった影響で、地元の中学生の成績上位層が隣接する前橋市の進学校を目指すようになり、全体的に学力が落ち込んでいた。そうした状況でも、難関大学をねらえる潜在能力を持つ生徒は少なからずいるというのが、教師間の共通意見だった。

「学力にかかわらず、入学時に半数以上の生徒が地元の群馬大学を第1志望に挙げますが、高校生活を謳歌する一方で、学習習慣が身につかないまま3年生になってしまったために、模試で合格圏と判定された大学を志望校にしたり、指定校推薦入試に頼ったりする生徒が少なからずいました」(横関先生)

そうした進路決定のあり方は、生徒の自信のなさの表れでもあると、教務主任の橋本晃一先生は指摘する。

「自分を過小評価している生徒が多いと感じます。能力が高くても、集団の中に埋没してしまい、その能力を開花させられないまま、

合格圏の大学に進学する。早くから高い目標を持って頑張ればもっと伸びると思うのですが、大学の情報が少ないこともあり、低学年時から難関大学を志望する生徒はほとんどいませんでした。1年生の時から視野を広げ、志を高めるような指導が必要だったのです」

1年次から志望校検討会を実施し 学年を引っ張る上位集団を育てる

改革は、教師の意識を変えることから始まっ



群馬県立桐生高校
横関素衛 よこせき・もとえ

教職歴36年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「仕事も学習もやらされるのではなく、自分からやれば楽しくなり、成果も上がる」



群馬県立桐生高校
橋本晃一 はしもと・こういち

教職歴30年。同校に赴任して9年目。教務主任。「人前で愚痴はこぼさない、他人の悪口は言わない、笑顔を忘れない」



群馬県立桐生高校
阿左見充良 あさみ・みつよし

教職歴18年。同校に赴任して5年目。1学年主任。「着眼大局、着手小局」



群馬県立桐生高校
星野将志 ほしの・まさし

教職歴9年。同校に赴任して5年目。1学年担任。教育情報部。「生徒が自分の人生の主役として輝くためのサポートをする」

た。横関先生が赴任した10年度、3年生の志望校検討会を、11月の1回のみから、7月・11月・1月の3回に増やした。

「本校には、新採の教師や進学校での指導経験のない教師も赴任します。志望校検討会の回数を増やすことで、教師が生徒に適切なアドバイスをする力をつけるとともに、進路指導に必要な視点を共有しようと考えました」(横関先生)

7月の検討会では、担任が学習・生活面で気になる生徒について取り上げ、夏休みの過ごし方や今後の指導方針などを検討し、直後の三者面談の材料にする。この段階では、志望校と学力の差が大きくても、志の高さを前向きに捉えて、その差を埋めるために必要な学習方法をアドバイス。11月は直前の模試結果を踏まえて志望校を絞り、1月はセンター試験の結果に基づいて第1志望校への出願可否を検討する。

11年度には、1・2年生対象の志望校検討会も12月に始めた。11月の進研模試やスタデイサポートの結果、高校入試の成績も見て、成績上位層の志望や学力を引き上げる方策を検討する。

「学年団で上位層の生徒の情報を共有し、12月の面談で『もっと難関の大学を目指せる』と生徒に前向きなアドバイスをすることがねらいです。学年の核になる上位集団を形成することで、学年全体で高い目標に向かう雰囲気

気をつくりたいと考えました」(横関先生)

模試に向けた決起集会で 学習を楽しむ雰囲気をつくる

橋本先生が学年主任を務めた11年度の1年生では、県外の国公立大学にも目を向けてほしいと考え、1学期から「難関大志望チャレンジセミナー」を実施した。難関国公立大学を志望する生徒を募り、大学の情報を提供し、大学の過去問題に取り組みことや模試の受験を勧めた。

「年数回、上位層を集めてセミナーを行ったところ、2年生になると自主的に入試問題を解き、教師に添削を求める生徒が現れました。なかには、卒業式後も学校に来て、個別学力検査の後期日程に向けて頑張る生徒もいました」(橋本先生)

13年度の1年生では、模試の成績優秀者を表彰した。単に成績優秀というわけでなく、「前回の模試から最も得点を伸ばした生徒」など、その時々で表彰の対象を変えようという工夫もした。同学年の担任だった現1学年主任の阿左見充良先生は、次のように述べる。

「本校は伝統的に生徒も教師もお祭り好き。そのため、7月模試の表彰式は、校長室で行い、担任全員が礼服で臨みました。演出により、模試に対する生徒の士気を高め、学年全体で頑張る雰囲気になったと思います」

16年度入試で東京大学や東北大学、横浜国立大学などに合格した生徒全員が、この1年生7月の模試で表彰を受けた者だった。当初は、群馬大学などの地元の国公立大学を志望していたが、表彰されたことで自信が付き、教師の励ましを受ける中で志を高めていったという。

学年で模試に作戦名をつけ、各学級でスローガンを掲げるという取り組みも、この学年が始めた。例えば、1年生11月模試は作戦名を「進撃の模試作戦」とし、各学級では「猪突猛進」「東男魂」といったスローガンを掲げた。中だるみが生じやすい1・2年生の2学期には、生徒の気持ちを引き締めるために、そのスローガンを幟に染め、体育館で「決起集会」を行った。

模試の分析を徹底的に行い、教科指導力向上を目指す

模試を教師の指導力向上に生かす取り組みも始めた。模試返却後、教科担当が「教科別模試分析表」に今回の成績、過年度比較・他校比較とその分析結果、分野別の課題や弱点、それらに対する打ち手などを記入。進路指導部が全教科・科目を一覧表(図)にまとめて、教師全員で共有する。

「模試を活用した教科指導力向上のためのPDCAサイクルを確立したいと考えました。課題を洗い出し、次回に向けた決意表明

図 「教科別模試分析表」2015年度2年生7月進研模試

教科	過年度・他校比較、原因	分野別分析(好調・不調の原因)	具体的な対応策等
国語	53.8 (273人) ●対昨年 -2.1 対一昨年 +3.3 ●対A高校 +2.5 対B高校 -2.8 対C高校 -1.9 ●古典分野における得点率低下による最上位層の減少。古典の読解問題に取り組んだ経験値が不足していること、語彙力を高める学習が不足していることが一因と考えられる。	●総合成績はやや低下したが、前回までと同じく、すべての大問において全国平均を上回ることができた。 ●今回は現代文の上昇傾向が見て取れる。特に小説分野は県内トップグループの高校に肉薄した(平均点でD高校を上回った)。すべての成績層において、全国平均得点率を上回ったのは特筆すべき成果であろう。評論においてもよく健闘し、すべての層で全国平均得点率を上回るか、同程度の成績を残した。 ●しかし、前回までの「得意分	●現代文においては、これまで行ってきた授業、補習を通しての問題演習を継続する(特に論述の演習を中心に行う)。 ●古典においては、多くの文章に触れる、読む、問題を解く経験を積ませることを重視したい。 ●古文分野において、語彙の絶対数が不足している状況が顕著であるため、週1回の古文単語の小テストを行うことで語彙力育成に努め

* 学校資料を基に編集部で作成

をすることで、模試の結果をより厳しく見る意識が、教師間に定着したと思います。平均偏差値は、10年度は50程度でしたが、この方法を始めた後は55に伸びました」(横関先生)

模試分析は学年の教科指導方針を立てる際にも役立つと、1学年担任の星野将志先生は語る。「模試で英語に問題があることが分かれば、英語の課題を増やして国語や数学の課題は控えるというように、各教科が足並みをそろえて課題の配分を調整できます。模試を通じて、教科を超えて支え合う連帯感が醸成されたことも、大きな成果でした」

進路指導部と学年団が連携し、キャリア教育を体系化

12年度には、数々の進路学習や進路行事の中でも特に必要なものを進路指導部と学年団で精選し、3年間のキャリア教育プランを構築した。その際、各学年主任を進路指導部の所属とし、進路指導部と学年団の連携を密にした。

「学年主任が進路指導部にも入ることで、進路行事を学年団主導の学年行事にできます。学年団と進路指導部の意思疎通が格段に進み、進路指導部以外の教師も、キャリア教育に積極的にかかわるようになりました」(横関先生)

各学年の進路行事は、学年主任が責任を持って実施する。例えば、2年生で行う大学教員の出張講義では、学年主任が学年団の教師に担当大学を振り分け、各教師が講師の派遣について大学と直接交渉する。また、全学年が対象の進路行事では、例えば、3年生の参加者が多い8月の学習合宿は3学年主任が担当するというように、参加生徒が多い学年の主任が進路行事の企画・運営を行い、他学年に参加を呼びかける。

教師の意欲を引き出すために、進路行事の取り組み方は学年団に任せている。ただし、各学年のノウハウを共有する場合は充実させている。毎年5月に学年合同の職員研修を実施。前年度の3年生の進路実績(センター試験の結果、進研模

試の成績推移、学習時間の推移などを含む）を踏まえて、取り組み内容について当該学年の担当者が説明する。

「学年間の指導の平準化が主目的ですが、若手教師には重要な研修の場にもなっています。先輩教師がどのような取り組みをしています。先輩教師がどのような取り組みをしています。具体的なエピソードを通して知ることができ、進路指導のノウハウを整理することができます」（星野先生）

進路だよりやキャンパスツアーで 県外の大学を知り、視野を広げる

生徒の視野を広げるための取り組みも充実させている。13年度から横関先生が発刊している進路だより「上昇桐生」では、横関先生が訪れた大学説明会の内容やキャンパスの雰囲気などを紹介。毎年、国公私立を問わず10大学程度を取り上げ、大学説明会が多く実施される1学期に集中的に発刊している。

「地方の国立大学出身の教師の中には、国立大学の併願校になる私立大学についてあまり知らないケースもあります。生徒だけでなく、先生方にも大学について詳しく知ってほしいと、進路だよりを発刊しています」（横関先生）

15年度に始まった東北大学オープンキャンパスツアーは、主に2年生が参加対象だが、1年

生と3年生の希望者も参加でき、初年度は80人が参加した。行き先を東北大学にした理由は、同大学が全学部一斉にオープンキャンパスを行うことと、同校からバスで行ける国立の難関大学であることだ。

当日、生徒は会場となる4つのキャンパスに分かれて、講義体験や研究室訪問をしたり、同校卒業生の東北大生と交流を深めたりする。薬学部志望の生徒は、「今回、初めてほかの学部を見て、物理にも興味を持った」と感想に書いた。オープンキャンパスツアーに参加して、志望とは異なる学部・学科にも視野を広げる生徒も現れている。

一連の改革により、四国や九州などの遠方の

国立大学を志望する生徒が増え、卒業生の進学先は多様になってきた。指定校推薦入試を希望する生徒は、改革前の約20人から、15年度は5人にまで減少。志を高く持って最後まで一般入試で頑張る生徒が増えている。

今後の課題は、学習時間の確保と学習の質の向上だ。

「2年生になると、学習時間が大きく落ち込みます。そうした中だるみの時期の意識を変えていくことで、生徒の学力はもっと伸びるはずですが、学習時間記録表の活用などにより学習量を確保しつつ、教師の指導力向上を通して授業の質を高め、進学実績をさらに高めたいと考えています」（阿左見先生）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

後輩教師が相談しやすい 雰囲気づくりを心がけたい

1学年担任 星野将志

本校に赴任して最初に課題に感じたことは、生徒の数学の応用力の不足でした。数学は私の担当教科ですが、前任の進学校では、生徒に教え過ぎないことを意識していました。しかし、本校の生徒の場合は、先を見通して問題に取り組むプランニング力が弱かったのです。そのため、説明を丁寧にする事で、生徒がより理解できるような授業を心がけました。

2016年3月には、1年生から3年間持ち上がった学年を初めて送り出しました。受験対策に入るタイミングが遅かったり、最後の詰めが甘かったりして、第1志望校に届かず、悔しい思いをした生徒もいました。この4月からは再び1年生を受け持っているのですが、この3年間の反省を踏まえて、生徒全員がそれぞれの志望を実現できるよう、大学入試への早めの意識づけと、集団で学習に取り組む雰囲気をつくっていきたいと思っています。

また、私は今年で教職歴10年目を迎えました。今までは先輩についていき、いろいろ教えてもらいましたが、これからは後輩の先生方に自分の経験やノウハウを伝えていくことを意識していかなければなりません。教師は「分からない」ということを口にしがらしいと思います。ですから、これからは後輩の相談に乗る立場として、分からないこと、不安に思うことをどんどん話してもらえるように声かけをしていきたいと考えています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年12月号指導変革の軌跡「[沖縄県立読谷高校](#)」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け